氏　　名　石野秀明（いしの ひであき）
学位(専攻分野)　博　士（人間・環境学）
学位記番号　人博第299号
学位授与の日付　平成17年7月25日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目　保育の場での関与的観察に基づく自己の探求：ライフサイクルの二重性と発達

論文調査委員　（主査）教授 鯨岡　峻　教授 杉万俊夫　教授 岡田敬司

論文内容の要旨

本学位申請論文は，保育園での6年間の関与的観察に基づき，幼児の自己のありようと観察者自身の自己の探求過程を詳細に描き出すことを通して，発達研究に新たな可能性を切り開こうとするものである。

全体は7つの章からなる。第1章から第3章では，乳幼児期の「自己のありよう」が周囲の「自己のありよう」との関係の中で立ち現れるものであることが詳細に記述されている。そして第4章から第6章では関与的観察の「方法論」が主題的に論じられている。ただし，記述内容と方法論は本来切り分けられるものではなく，双方の不可分性を明らかにすることも本論文の目的の一つとなっている。そこで各章の冒頭には「問いかけの背景」が置かれ，その時々の子どもの「発達の課題」と申請者自身の「生の課題」との関連性が示されている。そして最後の第7章では，その関連性を世代間にまたがる「自己」の探求過程と捉え直し，それを「ライフサイクルの二重性」という観点から総括している。

第1章では原初の「自己」が常に関係の中に生まれでるものであることを踏まえ，その理論的枠組みが検討されている。現に，0～1歳児と保育者は，絶えず「二人」でいることで初めて互いに「自己」たりうる。こうした両者の密接した関係が一体どのようなものであり，観察者＝実践者はいかにそこに入り込みつつそれを捉えることができるのか。この問いに応えるためには，原初的な「子ども―大人」の関係（通時的には生後間もない時期のその関係，共時的には自他関係の基層）を概念化する必要がある。申請者は近年の乳幼児心理学がその関係を捉えるときの概念枠を「相互性」と呼ぶ一方，それに対峙するかたちで「交叉」という概念枠を提示し，具体的な事例の記述を通してこの新しい概念枠に実質を与えることを試みている。

第2章では固有名（自分の名前や他人の名前）の意味について論じられている。従来，固有名は，1～2歳児が「名前」と「自己像/他者像」との結合を理解したことを示す現象として捉えられてきた。しかし申請者は，このような理解の仕方ではこの時期の固有名の使用と自己のありようとの繋がりを十分に掬い取ることはできないと指摘し，新たに「個別性＝自他の差異」という観点を持ち込んでいくつかの事例を分析し，その結果を踏まえて「ことば」と「自己」との関係を生涯発達的な観点から考察している。

第3章では，保育者のもとに感じられる2～3歳児の「自己」のありようについて詳細な事例分析が試みられ，それを踏まえて，この時期に成立しはじめる「自他関係の基本的構造」を捉えるために理論的枠組みを検討している。すなわち，従来議論されてきた「自我二重性」という概念は，「主体内の自他関係」の基本的構造を明らかにするにとどまるのに対して，「主体間の自他関係」を真に取り上げていくためには，「主体間の両義的な力動的関係」を取り上げる必要があると指摘している。そして，前者に拠るならば「認識主体」としての自己が浮き彫りになり，後者に拠るならば「実践主体」としての自己のありようが問題になると結論付けられている。

第4章では，発達心理学のなかでこれまで保育実践に根差した方法論の検討が十分に行われてこなかったことを踏まえ，本論で採る関与的観察について基礎的な考察を行なっている。申請者は，実践主体でもある観察者がその観察において多様

な「自己」のありようを身にまとうこと（まとわざるをえないこと），そしてその多様性を生かしてはじめて保育の場での子どもの「育ち」を捉える可能性が開かれることを明らかにしている。その上で，関与的観察一般の課題として，①観察者の自己記述という試みの方法論的展望，②関与的観察の自己言及性，③関与的観察の倫理的問題の三点を挙げ，考察を加えている。

第5章では，保育の場で子どもの発達をどのように捉え保障していくのかが検討されている。申請者は，それを捉える基本的な観点として「全ての子ども＝無差異/一元射影的なもの」と「一人ひとりの子ども＝差異/多元横断的なもの」の二つがあることを指摘し，前者の観点からは「段階的な直線」が，後者の観点からは「紆余曲折を孕んだ横断線」が，子どもの「自己」の発達過程として描き出されるとし，併せて，保育の実践的課題として「横断的なシステム」を構築する必要性を説いている。

第6章では，関与的観察の「個別性」に注目して考察を展開している。申請者は，具体的な事例として一人の子どもの「孤独感」を取り上げ，関与的観察の中に立ち現れてくる幼児の孤独感と幼児期の「自己」のありようを詳細に記述することによって，「個別性」を取り上げることの方法論的意義を明らかにしている。すなわち申請者は，「個別性」を徹底的に意識して描き出すことによってこそ，厳密で一般的な「基礎概念」に到達しうるとし，これを「概念的探求の旅」と称している。

最後の第7章では，第1章から第6章までの研究を総括すると共に，いかにして自ら発達変容する存在である観察者自身が発達の歴史を語りうるのか，その可能性が検討されている。申請者は，まず卒園式の場面を詳細に振り返り，そこでの出来事の意味はいま卒園する幼児とかつて卒園した観察者＝保育者との出会いによって互いの体験が交叉する中に生起するものであることを明らかにしている。またその折の「見る涙」という自己の体験を通して，保育研究と実践とを結び付ける可能性を提示すると共に，その出来事を記述することが生涯発達にどのような意味を持つかを詳細に考察している。さらに申請者は，自らが家族からひとり立ちする経験を描き出し，それによって「個人のライフサイクル」と「世代間のライフサイクル」との関連性を明らかにすると共に，Erikson の漸成図式を新たな視点から読み解いている。そして，これまでに明らかにされた「ライフサイクルの二重性」という観点から，本論文全体を「保育の場での自己の探求」として総括している。最後に申請者は，「束の間のはかない存在」である人間が，個別性の感覚を持って「自己」として生きるためには，原初的な徳としての「希望」が欠かせないとし，そこに研究者自身，みずから発達の歴史を生きつつ発達を語る可能性，すなわち発達研究の新しい可能性が開かれることを見て取っている。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は，保育園における保育実践に深く入り込み，6年間に亙って関与的観察を継続しながら，乳幼児の存在と自己のありようを詳細に描き出し，それを通してこれまでの発達心理学の知見や方法論に内在する問題を明らかにしつつ，その方法論と保育実践に新しい視点と知見をもたらした意欲的な労作である。

第1章から第3章では乳幼児期の「関係と自己」のありようが，第4章から第6章では関与的観察の「方法論」が主題的に論じられている。さらに第7章では，子どもの「発達の課題」と申請者自身の「生の課題」の関連性に着目し，それを「ライフサイクルの二重性」という考え方で整理して，本論全体をその観点から総括している。

第1章では，「原初的な関係」（乳幼児と保育者の密着した関係）における乳幼児と保育者の「自己のありよう」が検討されている。近年の乳幼児心理学においては，有能な乳児観を背景に，自己と他者，主観的経験と客観的行動を切り分けて論じる傾向があるが，申請者はこのような従来の「原初的な関係」の取り扱いを「相互性」と概括してその問題点を指摘する一方，具体的な事例の詳細な記述を通してこの関係を新たに「交叉」という概念によって捉えるべきことを提唱している。ここでの議論はきわめて説得的で，本論全体の二つの主題，すなわち乳幼児期の「関係と自己」のありようと，関与的観察の「方法論」とが相互に関連づけられながら整合的に論じられており，意欲的な論考として高く評価できる。

第2章では，1～2歳児の固有名と自己の関係について論じられている。従来，固有名は表象の成立と共に「自己像/他者像」の対象化を示す現象として解釈されてきた。しかし申請者は，こうした枠組みではこの時期の固有名の使用と幼児の自己のありようを十分に掬い取ることができないと指摘し，いくつかの事例を挙げて「個別性＝自他の差異」という観点か

らそれを捉え直している。この捉え直しはきわめて独創的で，従来の発達心理学の固有名に関する知見を一新するに足る大きな貢献であると高く評価できる。

第３章では，2～3歳児の示す「自己」のありようを観察事例に即して明らかにすると共に，「自他の基本的関係構造」についての新たな理論的枠組みが提示されている。申請者は，従来の「自我二重性」という概念では「主体内の自他関係」を捉えるにとどまって主体間の関係の問題を取り扱えないことを鋭く指摘し，「主体間の自他関係」は「主体間の両義的な力動的関係」として捉えられるべきことを詳細な事例の記述を通して主張している。特に，ワロンの personnalisme をこの観点から捉え直し再評価した部分は，従来の知見を大きく組み替える説得性を有し，学界への大きな貢献と高く評価できる。

第４章では，本論で採る関与的観察について基礎的な検討がなされている。近年，発達心理学の分野では質的研究法が再評価されつつあるが，肝心の関与的観察の内実に関する議論はきわめて乏しいと言わねばならない。申請者は「関与観察者のポジション」の多様性を示すことを通して，関与的観察の枠組みを整理しながら，観察者が保育の場で幼児の「育ち」をどのように捉え得るかを明らかにし，質的研究の今後の進むべき道を提示している。これは質的研究法の発展に大きく寄与するものである。なお，第３章およびこの第４章の基になった論文は，『教育心理学年報』に取り上げられ，評者から高い評価を得るとともに，学会誌にたびたび引用されている。

第５章では，申請者は従来の発達心理学が「すべての子ども」を捉えるための「一元射影的」な直線的発達モデルに立ってきたのに対して，保育の場における「一人ひとりの子ども」の個人差を捉えるためには，むしろ「多元横断的」な発達の捉え方が必要であることを主張し，発達の「地図作成」という新たなアプローチを提唱すると共に，実践上の課題として「横断的なシステム」を構築する必要性を説いている。これは保育実践者の観点に寄り添いつつ，保育実践の現代的課題に対する高い関心を示すものとして高く評価できる。

第６章では，従来，関与的観察の問題点とされてきた「個別性」の問題に対して，申請者はむしろそこに積極的な「方法論的意味」を見出すべきだと主張する。すなわち，「個別性」を徹底的に意識して描き出すことで，そこで用いられる概念は彫刻的に精緻化されていくが，この終わりなき過程の先にこそ，厳密で一般的な「基礎概念」が見いだされるのだとしている。ここでの議論は，質的アプローチの根本問題に関わるものであり，詳細な事例記述と折り合わされることで，今後，一層の研究の発展が期待される。

第７章は，卒園式の場面の詳細な記述を通して，観察される幼児と観察する大人とのあいだに生起する「出来事」がどのような性質を帯びるかについて，多面的な考察が展開されている。これは従来の客観主義的観察と一線を画す関与的観察の根本問題に通じるものである。その中で申請者は，「見る涙」という概念によって保育研究と実践とを結び付ける可能性を探り，さらに幼児の「ひとりだち」と自らの研究者としての「ひとりだち」を重ね合わせて，「個人のライフサイクル」と「世代間のライフサイクル」との関連性を明らかにし，これを「ライフサイクルの二重性」という観点から捉え直している。これは従来の発達の観点を大きく組み替える意欲的な構想であり，それ自体は高く評価できるが，これを説得性のあるものにするためには，さらに事例の積み重ねと概念の練成が必要である。今後の研究の蓄積に大いに期待したい。

このように，本学位申請論文は，保育の場に長期にわたって深く入り込みながら関与的観察を継続した独創的かつ意欲的な論考として高く評価できる。また現代の社会状況のなかで子どもの自己の発達のありように迫ろうとした点で，広義の環境の中で人間形成のありようを考究する人間・環境学専攻人間形成論講座の目的に叶った優れた論文である。

よって

本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成17年５月31日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。